夕刊フジ　2022 年 1 月 22 日（21 日発行）

ニッポン臨終図巻

ドクター和の

㉓⑨ 第76代総理大臣　海部俊樹

自らが歴史を創った生涯

政治家の仕事が本当に評価されるのは死んだ後であると言われることがあります。

当時はクリーンでソフトなイメージしかありませんでしたが、各新聞に載っていたお悔やみの記事を読んで、この人はとても仕事のできる総理大臣だったのだと気づかされました。

第76代総理大臣であった海部俊樹さんが、1月9日に都内の病院で死去されました。享年91。死因は老衰との発表です。

「91歳で老衰なんて早くないですか？」。ある若い記者さんからそう尋ねられました。「海部さんは91歳ですよ、天寿です。大往生ですよ」と答えましたが納得いかない様子。以前この連載で取り上げた第80代首相の羽田孜氏は2017年に82歳で亡くなりましたが、やはり死因は老衰で、そのときも別の記者さんから、「82歳で老衰と診断するなんて、病気を見落としたヤブ医者の言い訳なのでは？」と尋ねられたことがあります。人生100年時代という慣句が流行し、健康な人は誰しも100歳を迎えられるものと信じているのでしょうが、そんなわけがありません。

子供の成長には早い遅いがありますよね。老化現象には、それ以上に多少の早い遅いの個体差があります。

人の寿命は、遺伝要因と環境要因によって決まります。現代においては、食事や公衆衛生や医療の発達など、環境が劇的に進化したため、江戸時代は30代だった平均寿命が、80代まで伸びました。医者として、今まで2000人以上の死を見てきましたが、やはり80歳というのがひとつのターニングポイントであると思います。この壁を越えたならば、「長生きできた」と考えていいでしょう。

いやいや、これからはゲノム医療によって人は誰でも120歳まで生きられる時代になりますよ、と仰る専門家もいるかもしれません。老いも一つの病気であると主張する人もいます。

しかし、読者の皆さんは本当に120歳まで生きたいでしょうか？　若さもお金も友人も減らないままならば、確かに120歳はバラ色でしょうね…。

僕の在宅患者さんには、100歳以上の人も何人かおられますが、「ここまで生きるつもりはなかった。まさか子供に先に逝かれるなんて…」と仰る人も少なくありません。長生きするということは、多くの喪失を経験するということでもあるのです。

海部さんの座右の銘は、「自我作古（我をもっていにしえとなす）」だったそうです。長く生きることより、自らが歴史を創ることが大切――やはり海部さんは偉大な政治家でした。

長尾和宏（ながお・かずひろ）　医学博士。東京医大卒業後、大阪大第二内科入局。1995年、兵庫県尼崎市で長尾クリニックを開業。外来診療から在宅医療まで「人を診る」総合診療を目指す。この連載が『平成臨終図巻』として単行本化され、好評発売中。関西国際大学客員教授。